The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批評家クルティウスのヨーロッパ精神 : 同時代の作家や知識人との交流の中で
Author(s)	津田, 雅之
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（津田雅之）	
論文題名	批評家クルティウスのヨーロッパ精神 ―同時代の作家や知識人との交流の中で―

論文内容の要旨

アルザスに生まれたエルンスト・ロベルト・クルティウス(1886-1956)は、修辞学の連続性を論じた『ヨーロッパ文学とラテン中世』(1948)の著者として知られている。しかし、彼は、第一次世界大戦から1930年前半にかけて、そして、第二次世界大戦後の約10年間、ジャーナリズムに文芸批評を寄稿していた。戦間期の批評が対象としたのは、主に、当時の現代文学であった。彼はドイツ語圏では十分に知られていない文学作品を紹介する文章を執筆した。また、批評の対象とした作家達と友情を結び、書簡の遣り取りをした。彼の文芸批評は、それぞれの作家の研究史においても有名なものである。ただ、その作家を専門的に研究する者を除いては、クルティウスの批評は忘れられていると言ってよい。

本論文は、クルティウスの批評活動を対象としている。彼の批評活動を扱った先行研究としては、ウェレックの論文「クルティウスの文芸批評」(1978)などがある。この論文では、初期のクルティウスの批評の最大の関心が独仏の対立の緩和であり、その批評原理は本能的直観を重視しており、その方法論がテマティズムであることが指摘されている。また、彼が1930年代半ばに批評の執筆を止めたのは、ナチス時代のドイツで文章表現の自由が制限されたと感じたからというのがウェレックの意見である。

クルティウスは、ヨーロッパ文学を追及した。これは、ドイツ文学やフランス文学といった国民文学と比べ、一般的なものではなかった。だが、EUにおいては国家主権が重視されないために、ヨーロッパ文学は現実性を帯びてきている。主著『ヨーロッパ文学とラテン中世』におけるヨーロッパ文学が歴史的な（時間的な）広がりのあるものであるのに対し、彼の文芸批評で示されたのがヨーロッパ文学の空間的な広がりであった。

本論文が目指すのは、クルティウスの批評を通じて、彼のヨーロッパが空間的に拡大する過程を明らかにすることである。ドゥテュランスの『文学におけるヨーロッパをめぐって』(2002)やコンパニョン編の『1919年から1939年という動乱の時代における文芸共和国』(2011)で示されているように、戦間期にはヨーロッパのアイデンティティへの関心が高かった作家や知識人が多くいた。本論文は、彼の批評活動全体を扱うのではなく、こうしたヨーロッパ人達（ロマン・ロラン、ジッド、ホフマンスタール、オルテガ）をクルティウスが論じた批評や彼らとの交友を対象とした。しかし、最終章では、彼の批評と主著である『ヨーロッパ文学とラテン中世』の関係を考察している。先行研究との違いは、クルティウスの書簡にも目を配り、彼が批評の対象とした作品にも触れている点である。これにより、近現代におけるインテレクチュアル・ヒストリーにおいて、彼を位置付けることが可能になる。

第1章では、クルティウスの批評活動全体を概観し、文献学者という従来のイメージを打ち破ることを目的とした。この章では、処女作『新しいフランスの文学開拓者達』(1919)、マールブルク時代の批評、ハイデルベルク時代の批評、1930年代前半の批評、第二次世界大戦後の批評という五つの節に分けて、彼の仕事の流れを追った。これにより、彼の研究対象が変化する様子を確認した。また、この章では、彼がどのような媒体に執筆したのか、あるいは、彼がどのような文化的なグループに所属していたのかを具体的に描き出した。さらに、批評がどのような反応を引き起こしたのかということにも注目した。彼の批評はエッセイ風の文体で書かれているため、ドイツのアカデミズムにはこの文体を強く批判する者が多かったのである。

第2章では、クルティウスが『新しいフランスの文学開拓者達』で一章を割いたフランスの作家ロマン・ロランと彼の関係を考察した。ロランが青年時代に遊学したローマはクルティウスの終着点であり、『ヨーロッパ文学とラテン中世』の核心を成している。そして、物語の舞台がヨーロッパ各地を移動する長編小説『ジャン・クリストフ』(1904–1912)でもローマは重要な位置を占めていた。また、『ジャン・クリストフ』ではライン河が繰り返し描かれている。ロラン論でクルティウスはこの大河を三度言及し、主著においてもライン河は登場することになる。これに加え、このロラン論では、第一次世界大戦中にロランがスイスで行った反戦運動も論じられている。このロラン論を通じて、ロランやクルティウスの“ヨーロッパ精神”と第一次世界大戦の関係を考察した。最後に、ソヴィエトの共産主義に共感するロランとクルティウスの関係を分析することを通じて、クルティウスにおけるヨーロッパの領域にはスラヴ語圏が含まれないことに着目した。

アカデミズムで孤立したクルティウスにとって、雑誌『新フランス評論』周辺の作家達との友情は、重大な意味を持っていた。第3章では、彼とジッド、ジッドらが定期的に参加したポンティニーの旬日会、アリーヌ・マイリッシュによるルクセンブルクのサロン、クルティウスとジッドの往復書簡を論じた。まず、クルティウスがジッド論で、ジッドの熱心な外国文学受容を指摘していることに着目した。次に、ミュラーの著書『ジャーナリスティックな書き手としてクルティウス』(2008)では軽視された、哲学者デジャルダンよるポンティニーの旬日会とアリーヌ・マイリッシュによるサロンに触れた。本論文では、1922年と1924年のポンティニー論から、この会合の国際性はクルティウスの“ヨーロッパ精神”と、その反アカデミズム的傾向は『ヨーロッパ文学とラテン中世』で展開される方法論と関連し、ここで見られるフランスの社交的伝統の礼賛はこの頃のフランス寄りの姿勢を示すことを指摘した。続いて、政治や経済の側面で欧州統合に貢献した実業家エミール・マイリッシュの妻であるアリーヌ・マイリッシュによるサロンの多文化性を論じた。最後に、クルティウスとジッドの往復書簡を通じて、独仏間の緊張関係やクルティウスの知的関心の変化を検討した。

第4章では、ホフマンスタール論を分析した。第1節では、1949年のゲーテ論で、ホフマンスタールが文学的伝統の継承者とされていることを確認した。第2節では、戦後にホフマンスタールが行った講演「ヨーロッパの理念」に触れ、彼におけるヨーロッパが、二つのローマ帝国の流れを汲み、ドイツ系、ラテン系、スラヴ系の民族からなるオーストリアに立脚していたことを見た。第3節では、ホフマンスタールとクルティウスがバルザックの神秘主義的側面を共有し、『ドイツ読本』(1922)をめぐるクルティウスの書評から、ホフマンスタールが1750年から1850年のドイツ文学に好奇心を持っていたことを示した。第4節では、クルティウスによる追悼文から、保守革命を主張するホフマンスタールを精神的指導者と見做していること、彼の作品において王権や貴族が大きな意味を持っているとクルティウスが考えていること、そして、ロマンス語文献学の研究者としてのホフマンスタールにクルティウスが共感していたことに触れた。第5節では、1934年の批評「ゲオルゲ、ホフマンスタール、カルデロン」 には、クルティウスにおけるスペイン文化への関心の高まりが示されていると主張した。第6節では、ホフマンスタールとの差異である、クルティウスのスラヴ圏の文化への無関心に目を向けた。

第5章では、クルティウス研究の権威ジャックマール＝ド・ジュモーの『クルティウス　ヨーロッパ精神の起源と進展』(1998)ではあまり論じられていないオルテガとクルティウスの関係を扱った。『大衆の反逆』(1929)で欧州統合を主張したこの哲学者とクルティウスは、ヨーロッパというヴィジョンを共有していた。二人は、若い頃はジャーナリズムで外国の現代文化の紹介に努めたが、後期の仕事は古い時代の文化を論じたものが多い。本論文では、クルティウスのオルテガ論を起点として、彼とスペインの関係がその“ヨーロッパ精神”の形成において何を意味したのか検討した。さらに、彼のオルテガ論から、アカデミズムとは距離を置いた活動を行っていたクルティウスとオルテガにおいて、どのような批評の原理が存在したのか考えた。クルティウスの批評は、直観に基づくエッセイ風のものであるのに対し、オルテガの批評は直観よりも実証を重視し、構成への強い意志を感じさせるものであった。最後に、彼らの間の書簡に着目することにより、知的好奇心の変化を辿った。書簡で触れられている、大学に講演に招待し合う行為があるからこそ、二人はヨーロッパ的な学者であったのだ。

第6章では、クルティウスの批評と主著の関係を論じた。戦間期のクルティウスにおいて拡大していったのは、空間的なヨーロッパである。一方、主著で描かれているのは、歴史的な広がりを持つヨーロッパである。批評活動と主著には違いがあるが、接点がないわけではない。というのは、批評対象にした現代文学の作家達には、古典文学をよく読んでいる者も含まれていたからである。この章では、まず、修辞学の伝統が語られている『ヨーロッパ文学とラテン中世』の概略を述べた。次に、第2章から第5章で扱った四人の同時代のヨーロッパ人達や彼らを扱ったクルティウスの批評と主著の関係を分析した。続けて、この四人以外の同時代人を論じたクルティウスの批評と『ヨーロッパ文学とラテン中世』の関係に目を向けた。この四人の中には、ジッドやホフマンスタールのように主著の内容と深く関連する者もいれば、それほど接点のない者もいるのが明らかになった。これは、第2章から第5章で扱った四人の同時代のヨーロッパ人達の共通性が第一に空間的な“ヨーロッパ精神”であるためである。また、クルティウスが批評で扱った同時代人の文学者には、T・S・エリオットのように時間的なヨーロッパに対する意識が強く、それゆえに、ロマン・ロランやオルテガ以上に、『ヨーロッパ文学とラテン中世』と密接に繋がりがある者がいることも示された。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 津田雅之 ）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	北村　卓
	副 査	大阪大学　教授	三谷　研爾
	副 査	大阪大学　教授	入江　幸男
	副 査	大阪大学　教授	中　直一

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　批評家クルティウスのヨーロッパ精神
—同時代の作家や知識人との交流の中で—

学位申請者　津田　雅之

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　北村　　卓
副査　大阪大学教授　三谷　研爾
副査　大阪大学教授　入江　幸男
副査　大阪大学教授　中　　直一

【論文内容の要旨】

本論文は、エルンスト・ロベルト・クルティウス(1886-1956)による同時代のヨーロッパ人作家を対象とした文芸批評作品の考察を通して、クルティウスのヨーロッパ観がどのように拡がっていったのかを、主としてヨーロッパ精神の形成過程という観点から明らかにすると同時に、彼の批評活動が主著『ヨーロッパ文学とラテン中世』と密接なかかわりを有していたことを証明しようと試みるものである。なお本論文は、序論、六つの章、結論からなり、170 頁（400 字詰め原稿用紙に換算して約 600 枚）の分量である。

序論では、これまでの研究史を詳細に検討し、先行研究の限界を指摘した上で、クルティウス研究における本論文の位置と独自性、および本論の構成を述べている。

第 1 章「批評家クルティウスの軌跡」では、『フランス文学の開拓者達』(1919)およびマールブルク大学時代の批評(1920-24)、ハイデルベルク大学時代の批評(1924-1928)、1930 年代前半の批評、第二次大戦後の批評の 5 つに分けて、批評家としてのクルティウスの仕事を概観している。

第 2 章「ロマン・ロラン論」では、『ジャン・クリストフ』の主題であるドイツとフランスの対話に対するクルティウスの共感、およびロランとクルティウス双方おける独仏国境のライン河とヨーロッパの源泉としてローマの重要性を強調している。同時に、共産主義を肯定するロランに対し、クルティウスが距離を取っていくことも併せて指摘する。

第 3 章「クルティウスとジッド、ポンティニー、コルパハ」では、アンドレ・ジッドも参加していた汎ヨーロッパ的性格をもつポンティニー修道院の旬日会と、石炭と鉄鋼の分野で欧州統合を目指した実業家エミール・マイリッシュの妻アリーヌ・アイリッシュがルクセンブルク郊外のコルパハで主宰していたサロンが、クルティウスにおけるヨーロッパ観の空間的な拡がりに与えた影響を分析している。

第 4 章「フーゴー・フォン・ホフマンスタール論」においては、ホフマンスタールのロマンス語文献学の素養と貴族的な要素、さらにはスペインを含むハプスブルク帝国的な拡がりをもつヨーロッパ観によって、クルティウスが強い影響を受けたことが論じられている。ただし、ホフマンスタールにおけるスラブ世界への関心については、クルティウスには見られない点も指摘されている。

第 5 章「ホセ・オルテガ・イ・ガセット論」では、クルティウスのヨーロッパ観におけるスペインの重要性を明らかにしようと試みるとともに、オルテガのエリート主義、およびソビエトを排したヨーロッパ統一の主張にクルティウスとの接点を探ろうとしている。

第 6 章「クルティウスにおける批評と主著の関係」において、ホメロスからゲーテの時代までの文学を修辞学の観点から論じた主著『ヨーロッパ文学とラテン中世』では、歴史的パースペクティブにおいてヨーロッパが捉えられているのだが、そこにはクルティウスが文芸批評作品で論じたさまざまな作家の主題が反映していることを指摘している。そしてヨーロッパ精神の形成という観点からすれば、2 章から 5 章で検討した同時代の批評と主著は、これまで考えられてきたように無関係ではなく、連続性をもち、相補的な関係にあるとしている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、従来その学問的主著『ヨーロッパとラテン中世』を中心に論じられてきたクルティウスの活動を、彼が書き残した多くの同時代の文芸批評に焦点を据え、しかも文芸批評と主著との間に断絶を見るのではなく、そこに連続性を認め、トータルなクルティウス像を描き出そうとする意欲的な研究である。

とりわけ、多くの先行研究や関連文献を幅広く渉猟した上で論を展開している点、しかも英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語で書かれた数々の文献を原典に遡って確認する作業を着実に行い、しかもすべて自らの手によって日本語に翻訳している点については高く評価できる。

また、クルティウスの批評活動の展開を明らかにし、それと主著との間に相補性を見出そうとしたことは、新たな研究の可能性を拓くものであるといえる。さらに、ポンティニーとコルパハのサロンに注目し、その実態を詳細に調査するとともに、そこでクルティウスが育んだ交友関係について、書簡等にも目を配りつつ明らかにした点についても、貴重な成果であるといえる。

とはいえ、本論のキーワードとなる「ヨーロッパ精神」や「空間的ヨーロッパ」などの概念が明確に定義されているとは言い難いため、本論の主題設定がやや曖昧となっている。またクルティウス自身と批評対象との間の距離がはっきりと見定められていない場合がある。批評作品と主著との関係についても、その接点は必ずしも明確ではなく、むしろ間接的なエピソードが主となっている。さらには、論の構成ならびに論証の手続き、翻訳についてもいまだ再検討の余地がある。こうした不足の点はあるが、論文全体の価値を損なうものではない。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。